

# ばれいしょ

担当者 技能研究員 太田和成

試験課題名	品種栽培展示圃
目的	食用、加工用の品種における栽培特性を比較、検討し生産技術の普及に資する
期待される成果	各品種の特性を把握するとともに、輪作体型と作付け指標に沿った計画的な作付けを推進する
連携機関	上川農業改良普及センター士別支所 JA北ひびき和寒基幹支所 和寒町蔬菜組合連合会芋部会

## 1 供試品種・資材

品種

※農林1号  
とうや

キタアカリ  
トヨシロ

男爵薯  
シャドークイーン

※基準品種

## 2 耕種概要

土質 ～ 灰色低地土(埴壤土)

前作 ～ 豆類

浴光催芽 ～ 4月20日 植え付け日 ～ 6月3日 収穫日 ～ 9月14日

栽植密度 畦幅75cm×株間27cm 4,938株/10a

## 3 土壌診断結果と施肥量

### (1) 土壌診断結果

(mg/100g)

pH	EC	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	MgO	CaO	熱水抽出N
5.59	0.063	71.8	42.7	51.7	428.7	6.3

### (2) 土改資材と堆肥 (kg/10a)

無

### (3) 施肥内容 (成分量/%)

基肥 ～ 硫酸アンモニア (21.0 - 0 - 0) 6月2日 全層施肥  
基肥 ～ 粒状過リン酸石灰 (0 - 18.0 - 0) 6月2日 全層施肥  
基肥 ～ 硫酸加里 (0 - 0 - 50.0) 6月2日 全層施肥

### (4) 肥料の要素量

(kg/10a)

		N	P	K
基肥	硫酸アンモニア 33.3kg	7.0	—	—
基肥	粒状過リン酸石灰 38.9kg	—	7.0	—
基肥	硫酸加里 10.0kg	—	—	5.0
合計		7.0	7.0	5.0

## 4 調査項目

生育調査 ～ 浴光催芽始・植え付け・萌芽期・初期生育  
着蕾期・開花期・茎葉黄変期・枯凋期・疫病指数

収量調査 ～ 総収量・規格内割合・M以上の製品率

特性調査 ～ ライマン価

## 5 生育調査

項目	品種	農林1号	キタアカリ	男爵薯	とうや	トヨシロ	シャドークィーン
浴光催芽始		4月20日					
植え付け		5月6日					
萌芽期		6月16日	6月16日	6月16日	6月18日	6月17日	6月16日
初期生育(良5~不良1)		3	3	4	3	3	2
着蕾期		7月7日	7月4日	7月5日	7月1日	7月7日	7月9日
開花期		7月14日	7月11日	7月11日	7月18日	7月13日	7月16日
茎葉黄変期		8月27日	8月19日	8月19日	8月16日	8月24日	8月25日
枯凋期		9月12日	9月5日	9月3日	8月29日	9月8日	9月5日
疫病指数(多5~少1)		2	2	2	3	2	2

## 6 収量調査・特性調査

項目	品種	農林1号	キタアカリ	男爵薯	とうや	トヨシロ	シャドークィーン
総収量(kg/10a)		2,527	1,720	3,019	497	1,909	2,876
規格別収量(kg)	3L以上	104	44	308	48	405	46
	2L	721	291	614	31	357	151
	L	825	520	894	179	583	749
	LM	354	329	400	53	309	894
	M	201	247	397	66	31	456
	S	156	249	313	54	128	441
	外品	16	40	94	66	36	138
M以上の製品率(%)		87.2	83.3	86.5	75.8	91.4	79.9
ライマン価(%)		15.7	14.7	13.9	13.0	15.3	16.0

※規格 3L 260g 以上 2L 190~260g 未満 L 130~190g 未満 LM 90~130g 未満 M 70~90g 未満 S 70g 未満

## 7 病害虫防除履歴

殺虫剤	殺菌剤
	8月3日 プロポーズ顆粒水和剤 1,000倍

## 8 試験結果概要

### (1) 生育経過

浴光催芽を4月20日に始め、植え付けは、春先の天候不順で6月3日となった。昨年度より2週間以上遅くなった。萌芽期は、農林1号、キタアカリ、男爵薯、シャドークィーンが6月16日と最も早く、とうやが6月18日で最も遅くなった。

着蕾期は、とうやが7月1日で最も早く、シャドークィーンが7月9日と最も遅くなった。開花期も、とうやが7月8日で最も早く、シャドークィーンが7月16日と最も遅くなった。

枯凋期は、とうやが8月29日で最も早くなった。

### (2) 収量調査結果

10a当たり総収量は、男爵薯が3,019kg/10aで最も多い結果となった。昨年度と比較すると、全品種で大幅な減収となった。

M以上の製品率では、全品種7割以上となり、トヨシロの91.4%が最も高い結果となった。

デンプン価は、昨年度より高く、シャドークィーンの16.0%が最も高く、とうやの13.0%が最も低い結果となった。

### (3) 考察

本年度は、天候不順によって、植え付けが遅くなり、その後も生育は回復出来ずに収穫に至ったために、収量が減少したと考えられる。また、防除も出来なかったため、軟腐病などの病害による減収も多くあった。そのため、来年度は適期作業が行えるように努めたい。